

(2)安心の値段は変わる

中国製ギョーザによる中毒事件以降、身近な食品に係わる中国離れはいまだに根強く、生鮮品から加工原料に至るまで消費者の国産志向に従う形で、国産へのシフトが盛んに行われるようになっていきます。同時に産地偽装の話題もあきもせず継続して、食の安全・安心に対する消費者の不信感は強まるばかりです。農林漁業金融公庫の調べでも国産品は価格が高い(72%)が安全(80%)であると感じ、輸入品は安い(79%)が安全に問題(81%)があると決め付けています。他の調査でも国産品は割高でも安心できると感じ、値段が高くても買う人が多いという結果がみられます。

しかし打ち続く値上げ話に痛み付けられている庶民感覚は、価格に対して敏感にならざるを得ずに生活必需品の購入にも、より割安なものを選んだり(73%)安い店を探したり(60%)しながら節約を志向しています。それだけに安全・安心は気にかかるが、闇雲に高くしても好いとは思っていません。先の調査でも輸入品に較べて国産品はどのくらい割高であっても購入するかを聞いていますが、一割高では73%の人が容認しても二割高では32%、三割高では10%と急落しています。

健康や安全を特に意識している高齢層といえども節約志向も亦強く、やはりより安くを求めるのは止むを得ないことかもしれません。消費者は自分で品質や鮮度を判断できないから、必要以上に産地や原料表示などにこだわりを見せます。だから新鮮・安全・高級を謳えば、売れる風潮もみられますが、ゴマカシでない真実を率直につないで納得してもらう必要があるのではないのでしょうか。食と農との距離が離れすぎていると云われていますが、輸入だのみだった食を改めて見直す機会と考えたいものです。

(鈴木重雄筆)